

校長先生の初恋物語

第38話 遠ざかるハンバーグ

よしこさんと「2人だけの秘密」ができて、とっくんの幸せは最高でした。るんるんで家に帰ると、すぐにお母さんのところに行き、お願いしました。「お母さん、今度の遠足のお弁当、おかずは絶対ハンバーグを入れてね。だって、お母さんのハンバーグは、日本で一番おいしいんだもん。ぼく、どうしても食べたいな。」

こんなことを言われたら、どの家のお母さんもいちころです。とっくんのお母さんも、大喜びでした。

「日本一おいしいだなんて、としのりは正直な子ねえ。」

と、とっくんのお母さんもごきげんです。

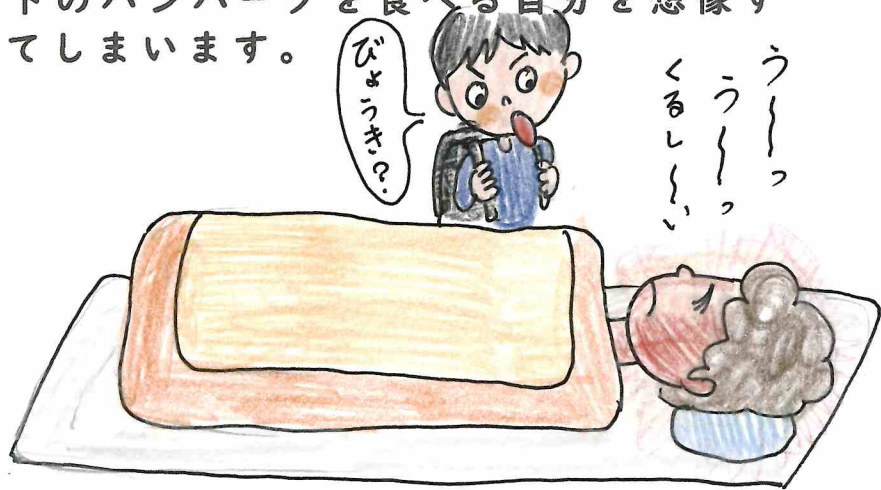
お母さんの気がとちゅうでかわらないように、毎日毎日お願いを続け、遠足の前の日になりました。いよいよ明日は、よしこさんの愛のハンバーグを食べることが出来ます。ハンバーグの形は、きっとハートの形でしょう。ハートのハンバーグを食べる自分を想像すると、ついつい、にやにやしてしまいます。

「ただいまーっ。」

いつもは、お母さんの「おかえりーっ。」が聞こえてくるのに家の中はしーんと静まりかえってしまいました。でも、お母さんのくつはげんかんにあります。「あれっ。お母さんは、家の中にいるはずなのに。」

おくの部屋に入っていき、とっくんを待っていたのは信じられないお母さんの姿でした。なんと、朝は元気におくりだしてくれたのに、お母さんはふとんをひいてねていました。しかも、頭の下には氷まくら。お母さんは赤い顔をして、「うーっ、うーっ。」と苦しそうにうなっていました。

ふつうだったら、おかあさんの心配をしますが、とっくんは、お



母さんの心配をしなくて、ハンバーグの心配をしました。「げっ。このままお母さんがねこんでしまったら、明日はハンバーグを作ってもらえないじゃないか。そしたら、よしこさんとハンバーグのこうかんができないじゃないか。」お母さんの熱ぐらいで、あきらめるわけにはいきません。愛のハンバーグを食べることが出来るチャンスは、これが最初で最後かもしれないのです。

「お母さん。起きてよ。明日は、ハンバーグ、作ってくれるんでしょ。」

お母さんは、苦しそうにこう言いました。

「無理よー。母さん、熱が出ちゃって、お買い物行ってないのよ。ハンバーグを作りたいけど、ひき肉がないのよ。ぜーっぜーっ。」

「だったら、すぐに買い物に行ってきてよ。寝てる場合じゃないでしょ。ひき肉買ってきてよーっ。起きてーっ。」

まったくひどい。ひどすぎるとっくんです。お母さんの体をゆらし、さらにこんなことを言います。「お母さんのうそつきーっ。買ってきてーっ。ハンバーグを作ってよーっ。」

とっくんは最初、気がつきませんでした。とっくんのわがままな声に、おそろしいかいぶつが、ゆっくり、ゆっくりとっくんに近づいていたのです。

「ずしん、ずしん・・・。」

とっくんにも、かいぶつの足音がやっとな聞こえました。

「ずしん、ずしん。」

その音は、どんどん大きくなります。とっくんはふるえが止まらなくなりました。

「ずしん、ずしん。」

ついにとっくんの目の前にかいぶつがあらわれました。かいぶつは、いかりの顔で、とっくんをにらみつけていました。



次回予告

かいぶつキングゴリラ